〈カメラ・ルポ〉

花のある“父子農家”

■ 小川町の水野さん一家の横顔

“相互信頼と経営の独立が、親子営農をうまく支えるコツでっしゅ”（父親）“親がいつまでも、米麦収入をガヂめてては駄目。息子に生産意欲と希望を持つゴッ、田畑の少しは手放すぐらいの気持が親になきぁ”（息子）……水野さん親子の「約束」の根本には、こういった割り切った新らしい考え方があるようだ。

花に関するかぎり息子の方が先生

上・おゝ、二人ともご苦労じゃったな…

下・花の組合員と来年度計画をねる。

上・独立した家計簿は若夫婦にはりをもたせる。

父と子の契約

ある〝あとつぎ〟確保への試み

農業は大きな転換期にある。といわれてから久しいが、その間にも、農村はいくつかの難問題解決のための試みを行なってきた。ごく耳新しい事がらだけみても、農業法人、農家月給制、経営の共同化など、農村が、自身の体質改善のために真剣に取り組んできていることを物語っている。しかも、農業従業者の気持が切実であるだけに、それぞれにかけた期待は大きかった。

ことに、農家後継者対策として、一昨年広島県にはじまり、中国地方からさらに全国的な拡がりをみている父子契約制も、そのひとつである。

父子契約制のねらうもの

たしかに「農家のあとつぎがいなくなる。」「次三男はやむを得ないとしても、長男まで都会へ出てしまう。」という声を、最近いたるところで聞く。また、一方青年の側からも「俺たちがいろいろやろうとしても、おやじに理解がない。」「いくら働いても、手もとに金はいくらも入らないじゃないか。」あるいはまた、保守的な家族形態を嫌われた結果からくる「嫁ぎきん」に対する切実な発言も出てこようというわけである。

こういった現実の中から生まれた父子契約制は、まず、農村青年が潜在的に抱いている農業に対する意欲をのばして、夢を満たしてやり、農業の魅力づくりをする、と同時に、古い家族制度をくずして、本当の意味の親子の積極的共同経営をはかり、合理的、企業的農業へと展開させようとするねらいをもっているのである。

熊本県下にも、父子契約といった言葉こそ使っていないが、すでに似たような試みが、いくつかみられるのである。

息子の気持をキャッチ

下益城郡小川町小野部田、水野末雄さん、利昭さん親子の場合、いまから六年前、親子の間でひとつの協定がなされた。

水野さんには息子が三人いた。次男が、親類へ養子に行ったあと、出征した長男が、フィリッピンで戦死。結局、三男利昭さんが頼みの綱となってしまった。

下益城郡、なかでも鹿児島本線沿線は、熊本までかっこうの通勤距離にあり、昔から、いわゆる勤め人が非常に多い。現に、小野部田の農家の八割が兼業農家しかも農業従事者夫婦二人というのが大半だ。水野さんはもし、息子が百姓はいやだ、とでも云い出したらコトだと思った。

水野さんは、まず、息子にビニール・ハウスによるキウリの促成栽培をまかせてしまうことにした。当時、小野部田地方は、そ菜の適地として県の指定も受けていたほどであるから、これは極めて自然であったし、同時に、息子の気持をまんまとキャッチすることに成功した。

このことについて、利昭さんは、「親がいつまでも米麦収入を握りしめているのでは駄目です。息子に生産意欲と経済的な希望を持たせるべきですよ。田畑を少しツブすぐらいの気持が親になきぁ。その点、たしかに親父は考えていたと思います。」と素直に認めている。

儲かる農業へ

水野さんの家には、親は自分の経験を押しつけ、子は親のいう通りの仕事をやるといった空気はない。自主独立の精神が、この家の家風なのかも知れない。息子の合理的農業への意欲も親ゆずりなのであろう。

水野さんは、農業簿記をつけ続けて四十年、農業経営を数字の上からも見つめ続けてきた。養子に行った次男の谷川静雄さんが幸い近所であるため、稲作で共同化できる作業は徹底的に共同でやる。要した経費は、耕作面積に応じて割りカンだ。こと営農に関しての、一貫した合理主義。水野さんの省力農業に対する執念のようなものだ。

一粒の麦死なずば

利昭さんのやる気を本ものにさせたのは、やはりカーネーションの栽培をはじめてから。先進地視察にはじまって、組合結成、鹿児島市場の新規開拓と、新しい仕事に若い意欲をもやしてきた。組合の仲間九人と、農業近代化資金の融資で、鉄骨ガラス張りの温室を計画したとき、「借金」しなかったことが自慢の老父は、心中おだやかではなかったらしい。しかし、花に関しては、父親の発言は行なわれない。相互信頼と経営独立とが、親子営農の支えとなったいるからだ。

毎晩、父親が農業簿記をつけるかたわらで、若い夫婦は、独立した自分達の会計の家計簿を整理する。「さ来年は、私がこの村で百姓をはじめてからちょうど五十年。その時にゃ、大いにお祝いをやらかして、そして、そろそろ隠居でもしまっしゆう。」水野さんは、むしろ誇らしげである。一粒の麦は、もはや一粒ではなさそうだ。（広報課）